

Title	程度強調を表す語構成要素に関する研究
Sub Title	
Author	陳, 文潔(Chen, Wenjie)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2023
Jtitle	日本語と日本語教育 No.51 (2023. 3) ,p.165- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20230300-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

程度強調を表す語構成要素に関する研究

陳 文潔

本論文は現代日本語で、程度強調の意を持ち、接頭辞・造語成分として合成語の前部分となる9種類の接頭辞、3種類の造語成分、計12種類の語構成要素について分析したものである。分析にあたっては、程度副詞の先行研究の中で見られる程度性と評価性という観点を導入し、それぞれの語構成要素を「程度指定型」「程度強調型」、「プラス評価」「マイナス評価」に分けて考察、分類を行った。具体的にはまず先行研究で指摘されている語構成要素に加え、BCCWJ、国語辞典、インターネット上の文字情報から用例を採集し、収集した用例に対して、「合成語の品詞性」、「後接語基の語種」として整理した。次に、例文の文脈を検討しながら、後接語基が表される程度性についての判断根拠と後接語基の評価性を考察した上で、各語構成要素の程度性、評価性を判定した。

その結果、程度強調接頭辞について、「大（オオ）ー」は「程度指定型」として、マイナス評価の語と結合しやすい傾向があり、マイナス評価を示す接頭辞として用いられることも可能になる。一方、「大（ダイ）ー」は「程度指定型」と「程度強調型」の両面を持ち、後接語基にはプラス評価ととらえられるものが多く、プラス評価の傾向を示す接頭辞と見なされる。そして、「超ー」「激ー」「絶ー」「素ー／素っー」「どー」はいずれも「程度強調型」に分類することができるが、「超ー」「激ー」の後接語基はプラス評価にもマイナス評価にも、どちらか一方に偏る傾向がなく、この2つの接頭辞には顕著な評価性が見られない。それに対し、「素ー／素っー」「どー」はマイナス評価の語基と結合しやすいため、マイナス評価寄りの接頭辞と判定されるが、「絶ー」は二字の漢語語基と結合するとき、その語基にはプラス評価のものが多く観察されたので、プラス評価寄りの接頭辞であると判定した。

また、程度強調に隣接する接頭辞「真（ま）ー」「丸（まる）ー」については「程度強調型」に属し、後接語基の評価性には特に傾向が認められないため、どちらも評価性を有しないことがわかる。程度強調接頭辞の周辺として位置づけられる「馬鹿」「くそ」「鬼」という造語成分については、「馬鹿」「くそ」が「程度強調型」として、マイナス評価の語基、プラス評価の語基のいずれにも結合できるが、これらの造語成分が語として用いられるときの好ましくない意味に影響を受け、後接語基にマイナスのニュアンスを付加する機能があり、マイナス評価を示す造語成分語として用いられやすいと考える。一方、「鬼」は「程度強調型」、「程度指定型」のいずれにも解釈できる。また、人間が想像された抽象性の高い生き物として、「鬼」の評価性は決めがたいが、後接語基にはプラス評価を示すものが多く、「鬼」はプラス評価寄りの造語成分として用いられることが多いように思われる。

従来は単に程度強調としてひとくくりで説明されてきた接頭辞・造語成分について、以上のような観点から考察した。